

Ⅱ. 調査地域の概要

1. 西陣地域と西陣学区

今回の調査地域である「西陣学区」は「西陣」のはば中央に位置している(図Ⅱ-1参照)。「西陣」とは京都市の上京区全域と北区の一部に集中している伝統産業、西陣織物業の盛んな地域を指している。

それでは具体的にどの範囲を「西陣」というのかとなると、明瞭に区画することは難しい。その理由はいくつか考えられるが、まず西陣織物の生産機能の差異とその集中度の規準を何によるのかが明らかになってはいないこと、さらに歴史的に織物を営んできた五学区¹⁾(乾隆、成逸、西陣、桃蔭、嘉楽)を中核としながらも、西陣の発展、成長によって次第に機業集中地域が周辺地域(特に北への)に拡大してきたこと、

また、「西陣」が大都市の一面であり、行政上の地域として設定されなかったことなどによる。

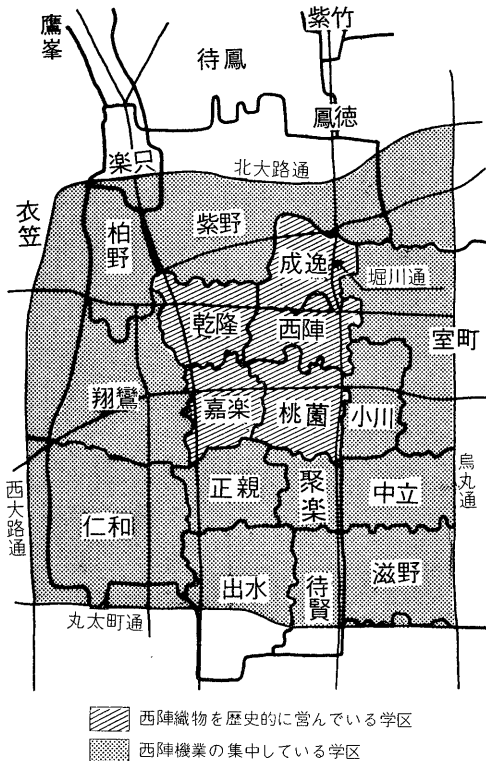
本稿では、「西陣」の地域を図Ⅱ-1に示した範囲、東は烏丸、南は丸太町、西は西大路、北は北大路通りで結んだところを「西陣」とする²⁾。学区数でいうと17学区が「西陣」にはいる。

調査対象の西陣学区は、「西陣」において、中核的な役割を果たしている五学区の一つである。歴史的には、室町末期にはすでに現在の「町」に通じる「町組」が22形成されている。「町組」とは、道路をはさんで形成された「町」が数ヶ町集まってできた隣保的な自治組織のことである。「町組」はその後時代に応じて変容を展開しているが、ここでは明治維新以後の学区形成過程を概略しておく。

1868年(明治元年)に、京都府は「町組」を廃止、従来の2町を単位にした「番組」制度を実施した。上京区一番組より四五番組まで編成されたのであるが、翌年には改変され、上京区は三三番組、下京区は三二番組とされた。現在の「学区」の原形がこの時にできている。西陣学区は上京区五番組に当たる。1892年(明治25年)になって、小学校域を中心とした「学区制」が施行され、西陣学区はそれ以後現在まで25カ町で構成されて現在に至っている。

さて、西陣学区は、西陣小学校³⁾(1869年、明治2年に土田町に設立)を中心に、東西約600m、南北約400mの範囲にひろがり、学区内の主要な通りは南北に、東から堀川、大宮、智恵光院通り、東西に、北から寺之内、上立売、五辻通りがある。寺院も多く、人形寺として知られる宝鏡寺(百々町)、妙蓮寺(妙蓮寺町)、本隆寺(絞屋町)といった本山格の寺院がある。学区に隣接する施設としては、堀川通りの東には、お茶の千家、堀川病院、大宮商店街などがあり、生活の利便性はよい。また、学区の西南

図Ⅱ-1 西陣地域と西陣学区



には、西陣の金融街ともいえる銀行、信用金庫の各支店が並んでいる。学区の南には、西陣織物業の 中枢的機能を果たす 西陣織物会館がある。

2. 人口と世帯数の推移

今日、大都市におけるドーナツ化現象は、一般的傾向として指摘されているところであるが京都市においても、人口のドーナツ化現象は昭和40年あたりから進展してきた。表Ⅱ-1は行政区別の人口の推移を指数化したものである。都心部の中京、下京、上京、東山区では人口流出という社会減による人口減少が著しい。それに対し、西京区、山科区を中心に伏見、右京といった周辺の各区は人口増加を示している。北区、左京区、南区は地理的に宅地開発の余地に乏しく、人口はほぼ停滞的である。

西陣地域は、人口ドーナツ化現象による人口減少地域である。伝統的地場産業としての西陣織物業の生産システム、特に職住混在による生産機能の集積効果を基本に発展⁴⁾してきた背景を考えれば、人口減少が西陣地域にもたらす影響は今後注視されねばならない。

表Ⅱ-2は、西陣学区の人口と世帯数の戦後の推移である。比較のために上京区の人口と世帯数の推移をみた。上京区の人口減少は先に述べたように、人口のドーナツ化現象の一面ではないかと考えられるが、西陣学区でも上京区全体とはほぼ同一の人口減少がみられる。人口の減少にもかかわらず、世帯数の減少は顕著ではな

い。その結果、一世帯あたりの人数は年々低下している。西陣学区では一世帯あたり2.86人(昭和57年)である。人口減少を年齢階級制にみると(表Ⅱ-3)、この20年間で、15～19歳を中心に若年層の減少がその中心であることがわかる。逆に60歳以上では人口は相対的にも絶対的にも増加している。特に65歳以上の高齢者

表Ⅱ-1 行政区別人口の推移
(40年=100、各年10月1日)

| 区 名 | | 45年 | 50年 | 55年 |
|-----|-----|-------|-------|-------|
| 北 | 区 | 103.4 | 105.3 | 103.8 |
| 上 | 京 区 | 88.3 | 77.7 | 70.5 |
| 左 | 京 区 | 101.0 | 101.5 | 99.5 |
| 中 | 京 区 | 86.9 | 76.3 | 70.6 |
| 東 | 山 区 | 88.9 | 77.5 | 68.7 |
| 山 | 科 区 | 148.0 | 198.6 | 214.5 |
| 下 | 京 区 | 85.7 | 73.6 | 64.0 |
| 南 | 区 | 98.8 | 95.3 | 92.9 |
| 右 | 京 区 | 116.1 | 119.5 | 128.0 |
| 西 | 京 区 | 191.2 | 205.9 | 238.9 |
| 伏 | 見 区 | 116.8 | 141.2 | 157.6 |
| 合 計 | | 104.0 | 107.0 | 107.9 |

注(1)「京都市統計書」昭和57年版による。
(2) 昭和51年10月1日、東山区から山科区、右京区から西京区がそれぞれ分区。

表Ⅱ-2 人 口・世 帯 数 の 推 移

| | 上 京 区 | | | | | 西 陣 学 区 | | | | |
|-------|---------|-------|--------|-------|--------------|---------|-------|-------|-------|--------------|
| | 人口総数 | 指 数 | 世 帯 数 | 指 数 | 一世帯当 たり人数 | 人口総数 | 指 数 | 世 帯 数 | 指 数 | 一世帯当 たり人数 |
| 昭和22年 | 125,029 | 100.0 | 31,747 | 100.0 | 3.94 | 4,161 | 100.0 | 1,023 | 100.0 | 4.07 |
| 25年 | 137,822 | 110.2 | 32,961 | 103.8 | 4.18 | 4,549 | 109.3 | 1,055 | 103.1 | 4.31 |
| 30年 | 149,835 | 119.8 | 34,014 | 107.1 | 4.41 | 4,841 | 116.3 | 1,065 | 104.1 | 4.55 |
| 35年 | 148,427 | 118.7 | 35,597 | 112.1 | 4.17 | 4,793 | 115.2 | 1,125 | 109.9 | 4.26 |
| 40年 | 140,879 | 112.7 | 36,260 | 114.2 | 3.89 | 4,729 | 113.7 | 1,207 | 117.9 | 3.92 |
| 45年 | 124,456 | 99.5 | 35,558 | 112.0 | 3.50 | 4,130 | 99.3 | 1,173 | 114.7 | 3.52 |
| 50年 | 109,520 | 87.6 | 34,769 | 109.5 | 3.15 | 3,530 | 84.8 | 1,097 | 107.2 | 3.22 |
| 55年 | 99,261 | 78.4 | 35,250 | 111.0 | 2.82 | 3,231 | 77.7 | 1,069 | 104.5 | 3.02 |
| 57年 | 96,295 | 77.0 | 35,195 | 110.9 | 2.74 | 3,172 | 76.2 | 1,108 | 108.3 | 2.86 |

注(1) 各年の「国勢調査」より作成。
(2) 昭和57年は10月1日現在、「京都市の人口動態」1982年12月より作成。

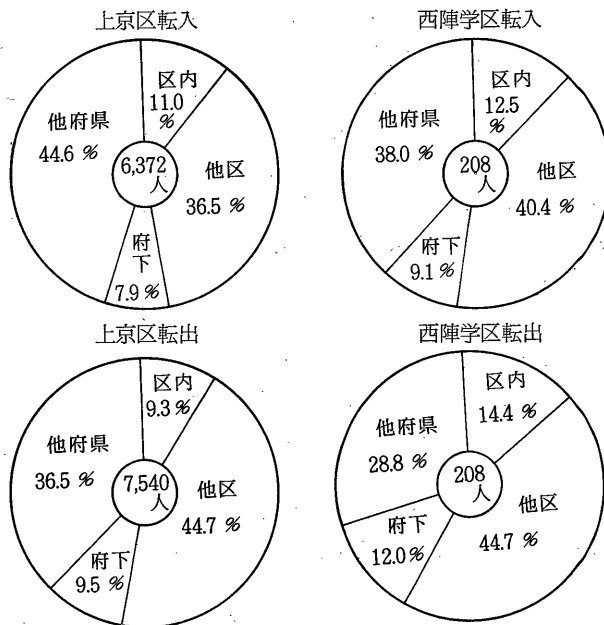
表Ⅱ-3 年 齢 階 級 別 人 口 構 成 比 (％)

| | 人口総数 | 15歳未満 | 15～19歳 | 20～29歳 | 30～39歳 | 40～49歳 | 50～59歳 | 60～64歳 | 65歳以上 |
|--------|---------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 〔西陣学区〕 | | | | | | | | | |
| 昭和35年 | 4,794 | 21.4 | 13.6 | 19.9 | 12.9 | 10.2 | 11.0 | 3.8 | 7.1 |
| 40年 | 4,729 | 18.0 | 13.2 | 20.6 | 14.0 | 11.4 | 9.8 | 13.0 | |
| 45年 | 4,130 | 17.8 | 8.5 | 22.3 | 14.3 | 11.2 | 9.8 | 5.5 | 10.7 |
| 50年 | 3,530 | 19.3 | 7.3 | 17.4 | 12.8 | 13.2 | 11.1 | 5.4 | 13.6 |
| 55年 | 3,231 | 18.8 | 7.8 | 14.0 | 13.0 | 13.5 | 12.1 | 4.7 | 16.1 |
| 〔上京区〕 | | | | | | | | | |
| 昭和35年 | 148,422 | 22.9 | 12.5 | 20.4 | 13.2 | 11.1 | 9.9 | 3.6 | 6.4 |
| 40年 | 140,879 | 18.0 | 13.6 | 21.4 | 13.7 | 10.9 | 10.6 | 11.8 | |
| 45年 | 124,456 | 17.6 | 9.2 | 23.0 | 13.0 | 11.9 | 10.6 | 5.0 | 9.7 |
| 50年 | 109,520 | 17.9 | 8.0 | 19.5 | 12.5 | 13.1 | 10.9 | 5.5 | 12.5 |
| 55年 | 99,261 | 16.4 | 8.7 | 16.5 | 12.9 | 12.9 | 12.3 | 5.2 | 15.2 |

注 各年の「国勢調査」より作成。

図Ⅱ-2④ 住民の転出入の地域（昭和56年10月～57年9月）

の増加が著しい。調査対象地域である西陣学区では全国水準より一足早く高齢化社会が成立しているといえよう。人口の動態をさらに社会増でみると（表Ⅱ-4①②），西陣学区の移動は，転入を転出が上まわってきたが，転出先を昭和57年でみると，西陣学区では京都市内の他区（上京区以外）への移動が44.7%と高い。以上のことから，西陣学区の人口減少は，上京区全体の傾向とはほぼ同じ傾向を示し，若年層の市内移動，高齢者層の滞留という世帯分離化傾向を顕著にしなが，高齢化地域を形成しつつあるといえよう。



3. 就業構造と産業構造

上京区の実業構造は，昭和55年就業構造基本調査によると，就業人口5万人，そのうち建設・製造業2万1千人，卸・小売業1万5千人，サービス業1万人となっており，この3業種で全体の91%となっている。また従業上の地位別では，雇用者が61%ついで自営業主が23%となっている。なお，建設・製造業では，その大半は繊維工業である（図Ⅱ-3）。

つぎに，就業人口の推移では，昭和35年を

100とすると，55年では72となっている。就業人口の減少が指摘される。その中心は製造業である。産業別就業人口の割合ではこの20年間で49%から41%へと低下してきている。従業上の地位別では，雇用者の割合が低下してきている。このことから，製造業に雇用者が多く。卸・小売業，サービス業に自営業主が多いことが指摘される（表Ⅱ-4）。

西陣学区の実業構造は，基本的には上京区と

表Ⅱ-4① 人 口 移 動

| 年 次 | 上 京 区 | | | | | | 西 陣 学 区 | | | | | |
|-------|-------|-----|------|-------|--------|--------|---------|-----|------|-----|-----|------|
| | 出 生 | 死 亡 | 自然増加 | 転 入 | 転 出 | 社会増加 | 出 生 | 死 亡 | 自然増加 | 転 入 | 転 出 | 社会増加 |
| 昭和46年 | 1,622 | 889 | 733 | 8,545 | 11,771 | △3,226 | 72 | 44 | 28 | 285 | 344 | △ 59 |
| 47年 | 1,640 | 914 | 726 | 8,737 | 12,127 | △3,390 | 74 | 48 | 26 | 212 | 388 | △176 |
| 48年 | 1,513 | 955 | 558 | 8,255 | 12,072 | △3,817 | 55 | 47 | 8 | 205 | 378 | △173 |
| 49年 | 1,304 | 974 | 330 | 7,024 | 10,792 | △3,768 | 48 | 39 | 9 | 179 | 311 | △132 |
| 50年 | 1,230 | 871 | 359 | 6,926 | 10,101 | △3,175 | 46 | 34 | 12 | 181 | 285 | △104 |
| 51年 | 1,105 | 910 | 195 | 7,729 | 9,905 | △2,176 | 43 | 34 | 9 | 214 | 271 | △ 57 |
| 52年 | 1,038 | 859 | 179 | 6,812 | 9,385 | △2,573 | 31 | 29 | 2 | 170 | 238 | △ 68 |
| 53年 | 908 | 834 | 74 | 6,296 | 8,885 | △2,589 | 33 | 31 | 2 | 168 | 255 | △ 87 |
| 54年 | 847 | 883 | △36 | 6,698 | 8,919 | △2,221 | 23 | 28 | △5 | 191 | 235 | △ 44 |
| 55年 | 775 | 851 | △76 | 6,389 | 8,350 | △1,961 | 28 | 34 | △6 | 174 | 230 | △ 56 |

表Ⅱ-4② 転 出 入 の 地 域 (昭和56年10月～55年9月)

| | 区 内 | 他 区 | 府 下 | 他 府 県 | 計 | 移 動 率 |
|-----------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------|-------|
| 〔転入〕京 都 市 | 25,217(19.8) | 41,890(32.9) | 11,735(9.2) | 48,426(38.1) | 127,268 | 8.6 |
| 上 京 区 | 763(11.0) | 2,324(36.5) | 504(7.9) | 2,841(44.6) | 6,372 | 6.6 |
| 西陣学区 | 26(12.5) | 84(40.4) | 19(9.1) | 79(38.0) | 208 | 6.6 |
| 〔転出〕京 都 市 | 25,217(19.1) | 42,002(31.9) | 14,784(11.2) | 49,852(37.8) | 131,855 | 8.9 |
| 上 京 区 | 703(9.3) | 3,368(44.7) | 716(9.5) | 2,753(36.5) | 7,540 | 7.8 |
| 西陣学区 | 30(14.4) | 93(44.7) | 25(12.0) | 60(28.8) | 208 | 6.6 |

注(1) 京都市総務局「京都市の人口動態」1982年12月より作成。

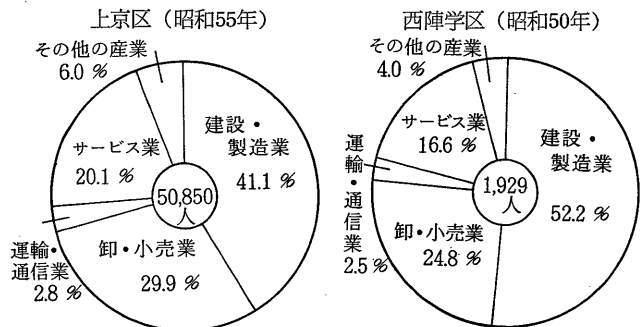
(2) 移動率は57年10月の人口総数を基数にして算出した。

ほぼ同じ特徴をもっている。上京区全体より西陣織物業の集中度が高いため、製造業の就業人口の減少がより著しい点がかがえる。

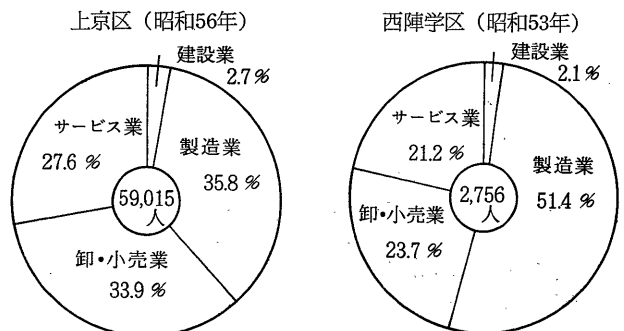
次に上京区の産業構造は昭和56年事業所統計調査でみると、事業所数は1万2千軒である。従業者は5万9千人となっており、就業人口を8千人上まわっている。製造業の事業所4千5百軒、従業者2万1千人、卸・小売業の事業所4千5百軒、従業者2万人、サービス業の事業所2千3百軒、従業者1万6千人となっている。この3業種で全事業所の94%となっており、従業者では全体の97%となる(図Ⅱ-4)。

つぎに、事業所数の推移では、昭和41年から56年まで変動はわずかである。従業者数ではわずかであるが減少している。産業別では、製造業において、事業所の減少にくらべて従業者の

図Ⅱ-3 就 業 構 造



図Ⅱ-4 産 業 構 造



減少が30%と著しい。卸・小売業とサービス業では事業所、従業者とも増加傾向がみられる(表Ⅱ-5)。

西陣学区の産業構造は、基本的に上京区とはほぼ同じ特徴であるといえる。製造業、卸・小売業、サービス業の3業種の事業所数は全体の96%になる。従業者数では96%である。しかし、就業構造においても触れたように、西陣織物業不況の影響を反映して、上京区全体に比べる

と、事業所、従業者数の減少が指摘される。産業別では減少しているのは製造業のみである。昭和41年から53年の指数でいう事業所数で80、従業者数で70となっている。

なお、従業者規模別構成でいうと、西陣学区は上京区全体に比較して製造業を中心とする第二次産業では比較的小規模経営が少ないということが指摘される。西陣織物は自営業的零細経営(賃織)が大部分をしめるが、西陣学区では

表Ⅱ-4 産業・従業上の地位別就業人口の推移

(%)

| 年次 | 就業人口 総数 | 産業別 | | | | | | | 従業上の地位別 | | |
|------|------------|---------------|------------|-----------|------------|-----------|------------|-----|---------|-----------|------|
| | | 農林漁業 | 建設・ 製造業 | 卸・ 小売業 | 運輸・ 通信業 | サービス 業 | その他 の産業 | | 自営業 | 家族 従業者 | 雇用者 |
| 上京区 | 昭和35年 | 70,635(100.0) | 0.2 | 48.9 | 25.3 | 3.3 | 16.6 | 5.7 | — | — | — |
| | 40年 | 74,627(100.0) | 0.2 | 50.0 | 25.5 | 3.5 | 15.8 | 5.1 | 18.8 | 14.1 | 66.9 |
| | 45年 | 66,417(100.0) | 0.2 | 47.6 | 26.8 | 3.1 | 16.9 | 5.3 | 21.1 | 14.1 | 64.9 |
| | 50年 | 56,741(100.0) | 0.2 | 44.9 | 28.2 | 2.9 | 17.9 | 6.0 | 22.5 | 15.9 | 61.5 |
| | 55年 | 50,850(100.0) | 0.2 | 41.1 | 29.9 | 2.8 | 20.1 | 5.9 | 23.2 | 16.0 | 60.7 |
| 西陣学区 | 昭和35年 | 2,483(100.0) | — | 61.1 | 20.3 | 2.1 | 12.9 | 3.6 | — | — | — |
| | 40年 | 2,592(100.0) | 1 | 59.0 | 21.6 | 2.5 | 13.0 | 3.8 | 17.4 | 17.0 | 65.2 |
| | 45年 | 2,329(100.0) | — | 55.4 | 24.4 | 2.6 | 14.4 | 3.8 | 21.4 | 17.5 | 61.4 |
| | 50年 | 1,929(100.0) | — | 52.2 | 24.8 | 2.5 | 16.6 | 4.0 | 23.4 | 10.5 | 56.9 |

注(1) 京都市小地域(元学区)「主要統計書」1981年より作成。

(2) 上京区の昭和55年の数値は「京都市統計書」昭和57年版より。

表Ⅱ-5① 西陣学区事業所数および従業員数

(%)

| 年次 | 総数 | | うち主要産業 | | | | | | | | | |
|-------|------------|--------------|--------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|
| | 事業所数 | | 建設業 | | 製造業 | | 卸・小売業 | | 不動産業 | | サービス業 | |
| | 事業所数 | 従業員数 | 事業所数 | 従業員数 | 事業所数 | 従業員数 | 事業所数 | 従業員数 | 事業所数 | 従業員数 | 事業所数 | 従業員数 |
| 昭和41年 | 583(100.0) | 3,193(100.0) | 1.2 | 0.7 | 52.5 | 63.8 | 30.2 | 19.9 | 0.3 | — | 14.4 | 14.0 |
| 44年 | 529(100.0) | 2,719(100.0) | 0.9 | 0.6 | 57.1 | 63.4 | 24.2 | 16.1 | 0.4 | — | 15.7 | 18.8 |
| 47年 | 535(100.0) | 2,965(100.0) | 1.5 | 1.7 | 49.2 | 50.4 | 30.1 | 29.0 | 0.4 | — | 17.9 | 17.7 |
| 50年 | 537(100.0) | 2,953(100.0) | 1.9 | 1.8 | 48.8 | 49.7 | 29.8 | 27.2 | 0.7 | 0.5 | 17.9 | 19.7 |
| 53年 | 486(100.0) | 2,756(100.0) | 1.9 | 2.1 | 50.2 | 51.4 | 29.4 | 23.7 | 0.8 | 0.3 | 16.7 | 21.2 |

注 京都市小地域(元学区)「主要統計書」1981年より作成。

表Ⅱ-5② 上京区事業所数および従業員数

(%)

| 年次 | 総数 | | うち主要産業 | | | | | | | | | |
|-------|---------------|---------------|--------|------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|
| | 事業所数 | | 建設業 | | 製造業 | | 卸・小売業 | | 不動産業 | | サービス業 | |
| | 事業所数 | 従業員数 | 事業所数 | 従業員数 | 事業所数 | 従業員数 | 事業所数 | 従業員数 | 事業所数 | 従業員数 | 事業所数 | 従業員数 |
| 昭和41年 | 11,824(100.0) | 64,246(100.0) | 2.2 | 3.1 | 41.1 | 46.3 | 36.5 | 26.2 | 1.1 | 0.6 | 17.4 | 19.6 |
| 44年 | 11,625(100.0) | 62,203(100.0) | 2.2 | 2.9 | 40.8 | 45.2 | 36.9 | 26.1 | 1.2 | 0.6 | 17.3 | 21.0 |
| 47年 | 12,452(100.0) | 64,424(100.0) | 2.2 | 2.3 | 42.0 | 40.4 | 36.2 | 28.4 | 1.5 | 0.7 | 16.7 | 17.7 |
| 50年 | 12,517(100.0) | 66,171(100.0) | 2.3 | 2.5 | 41.1 | 36.1 | 36.0 | 27.8 | 1.7 | 0.7 | 17.2 | 17.9 |
| 53年 | 12,070(100.0) | 66,547(100.0) | 2.4 | 2.3 | 38.6 | 32.5 | 37.1 | 27.9 | 1.9 | 0.8 | 18.0 | 22.4 |
| 56年 | 12,028(100.0) | 59,015(100.0) | 2.7 | 2.7 | 37.3 | 35.8 | 37.8 | 33.9 | 2.4 | 1.1 | 18.8 | 27.6 |

注 京都市小地域(元学区)「主要統計書」1981年より作成。

表Ⅱ-6 従業者規模別・産業別事業所数

| 規 模 | 上 京 区 | | 西 陣 学 区 | |
|---------|--------------|--------------|------------|------------|
| | 第二次産業 | 第三次産業 | 第二次産業 | 第三次産業 |
| 1～4 人 | 3,690 (74.6) | 5,641 (79.3) | 152 (60.1) | 177 (76.0) |
| 5～9 人 | 772 (15.6) | 898 (12.6) | 65 (25.7) | 34 (14.6) |
| 10～19 人 | 321 (6.5) | 313 (4.4) | 22 (8.7) | 13 (5.6) |
| 20～29 人 | 84 (1.7) | 90 (1.3) | 7 (2.8) | 6 (2.6) |
| 30～49 人 | 51 (1.0) | 83 (1.2) | 6 (2.4) | 2 (0.9) |
| 50～99 人 | 22 (0.4) | 54 (0.8) | 1 (0.4) | — |
| 100 人以上 | 9 (0.2) | 39 (0.5) | — | 1 (0.4) |
| 総 計 | 4,949(100.0) | 7,118(100.0) | 253(100.0) | 233(100.0) |

注 昭和53年「事業所統計」による。

織元といわれる比較的安定した階層が多いことが考えられる(表Ⅱ-6)。

表Ⅱ-7は、就業人口の昼夜間比をみたものである。西陣学区のデーターではないが、産業の集中度と通勤範囲を知る事ができる。上京区の昼夜間人口比(就業者)は132.3であり、昼間人口が夜間人口を大きく上まわっている。上京区の企業の集人機能を示すものである。上京区の流出率は35.5%であるが、その流出先の主な地域は中京区(8.8%)、下京区(4.9%)、北区(3.9%)、右京区(3.9%)である。逆に流入率は51.2%である。主な流入地域は北区(9.3%)、左京区(7.7%)、右京区(6.2%)、伏見区(3.9%)となっている。先述の転出・転入の特徴を考慮すれば、上京区は中京、下京といった都市部への通勤者をかかえ、北区、左京区、右

京区への転出と、そこから上京区への通勤といった人口移動のパターンが推測される。

表Ⅱ-7 上京区の実業人口の昼夜間構成

| | | | |
|------|---------|------|----------|
| 夜間人口 | 50,850人 | 昼間人口 | 67,273人 |
| 完結率 | 64.5% | 自給率 | 48.8% |
| 流出率 | 35.5 | 流入率 | 51.2 |
| 流出地 | 中京区 8.8 | 流入地 | 北 区 9.3 |
| | 下京区 4.9 | | 左京区 7.7 |
| | 北 区 3.9 | | 右京区 6.2 |
| | 右京区 3.9 | | 伏見区 3.9 |
| | 大阪府 3.5 | | 中京区 3.1 |
| | 左京区 3.0 | | 山科区 2.6 |
| | その他 7.5 | | 西京区 2.0 |
| | | | その他 16.4 |

注 昭和55年「国勢調査」(従業地・通学地集計)より作成。昼夜間人口比 132.3

4. 町内の構成

西陣学区には27の町があるが、町内会組織としては25ある。これは、戦中の建物強制疎開による町内戸数の減少等により、隣接町との合併、昭和38年に舟橋町に公団住宅の建設による団地自治会の成立によるものである。

西陣学区の調査に先だち、学区内各町内の会長に、簡単な面接による聴取り調査を実施した。その結果を表Ⅱ-8に整理した。

西陣学区の町内の歴史は非常に古く、それぞれの町は伝統的な町内行事と組織を有している。役員の出選方法は町内によって多少異なる

が、基本的には輪番制を採用している。

町内会運営の財源は、町会費を中心に、古紙回収や寄付によってまかなっているが、地藏盆などの行事は別会計で子供数に応じて徴収している町内もある。町内会費は月に400～600円と均一割当てが多いが、古美濃部町、妙蓮寺前町にみられるように、家によって段階をもうけている町内もある。

年間の行事は、新年会に始まり、四月には今宮神社へのお千度、八月には地藏盆、秋には学区運動会、リクリエーションなどがもたれてい

表Ⅱ-8 町内会の概要一覧 (昭和57年9月, 町内会長への聴取結果)

| 町名 | 世帯数 | 昭和55年国調人口 | | | 隣組数 | 世帯数 | 町会費 (月) | 役員の選 出方法 | 規約 | そ の 他 |
|-----------|-----|-----------|-----|-----|-----|-----|---------------|-------------|----|-------------|
| | | 総計 | 男 | 女 | | | | | | |
| 北 舟 橋 町 | 106 | 295 | 137 | 158 | 3 | 19 | 350 | 輪 番 | 有 | |
| 今出川堀川団地 | | | | | 8 | 96 | 300 | 〃 | 有 | |
| 山 名 町 | 16 | 40 | 17 | 23 | 1 | 18 | 800 | 〃 | 有 | 会長のみ班長互選 |
| 古美濃部町 | 17 | 39 | 20 | 19 | 6 | 53 | | 〃 | | 会費は家によって異なる |
| 聖 天 町 | 41 | 143 | 66 | 77 | 5 | 49 | 600 | 〃 | 無 | 町家の家賃収入あり |
| 妙蓮寺前町 | 59 | 206 | 101 | 105 | 6 | 62 | 390～ 1,100 | 選 挙 | 有 | |
| 芝 葉 師 町 | 39 | 140 | 61 | 79 | 4 | 36 | 500 | 〃 | 無 | |
| 幸 在 町 | 16 | 50 | 27 | 23 | 1 | 18 | 400 | 輪 番 | 無 | |
| 阿 弥 陀 寺 町 | 5 | 21 | 11 | 10 | | | | | | |
| 藤 木 町 | 44 | 125 | 52 | 73 | 6 | 43 | 650 | 選 挙 | 無 | 戦後合併 |
| 東 石 屋 町 | 40 | 130 | 68 | 62 | 5 | 42 | 500 | 輪 番 | 有 | |
| 西 石 屋 町 | 14 | 43 | 22 | 21 | 1 | 10 | 300 | 〃 | 無 | |
| 慈 眼 庵 町 | 43 | 150 | 73 | 77 | 4 | 40 | 400 | 〃 | 無 | |
| 西 北 小 路 町 | 67 | 201 | 102 | 99 | 5 | 64 | 450 | 〃 | 無 | |
| 大 猪 熊 町 | 74 | 218 | 100 | 118 | 7 | 73 | 350 | 〃 | 無 | |
| | | | | | | | | | | |

る。しかし, 子供や青年層の人口減少等から, 近年はこうした行事への参加者は限定されているように思われる。

なお, 西陣学区内の町内の概要については, すでに各氏の詳細な研究があるので, ここでは省略する。

〔註〕

- 1) 奥村 達夫「西陣／オチョーナイ」, 上田 篤編『京町家・コミュニティ研究』鹿島出版会, 1976年, 121頁。
- 2) 平凡社の『京都市の地名』によれば, 西陣とは「東に堀川を限り, 西ハ北野七本松を限り, 北ハ大徳寺今宮旅所限り, 南ハ一条限り, 又ハ中立売通」と京都御役所向大概覚書から引用している。なお, 西陣の地域規定の諸説に関しては拙稿「機業家の職業経歴と階層構成」佛教大学社会学研究所『紀要』3号, 1982年において紹介したので参照。
- 3) 西陣小学校は初め猪熊通上立売上ル土田町に建営

され, 文織校と称したが, 明治17年, 上立売大宮東入幸在町に移転し, 西陣校と改称され現在に至っている。

- 5) 「西陣織物業の特質は, これを一口で言うなら, 個々の機業の零細性と製造工程の社会的分業化・専門化に尽きるであろう。これは, 景気変動の影響を受け易い体質をもつ織物業が, その危険性をできるだけ分散させるため, 製造工程のあらゆる段階で分業化・下請化を図り, 個々の機業については, 手堅くその膨脹を抑制するという経営方針が反映されてきたからである。(中略) しかもこれらの仕事に近代的な『職業』として確立する以前の「家業」「生業」の段階にあることから, いたるところで仕事場は生活の場と重なりあって, まち全体はもとより, 個々の住宅においても職住一体化された生活が展開されている。」広原 盛明「混合地域と併用住宅—西陣地域の再開発における住宅問題」『都市問題研究』No.215, 1968年, 15~17頁。

(高橋伸一)